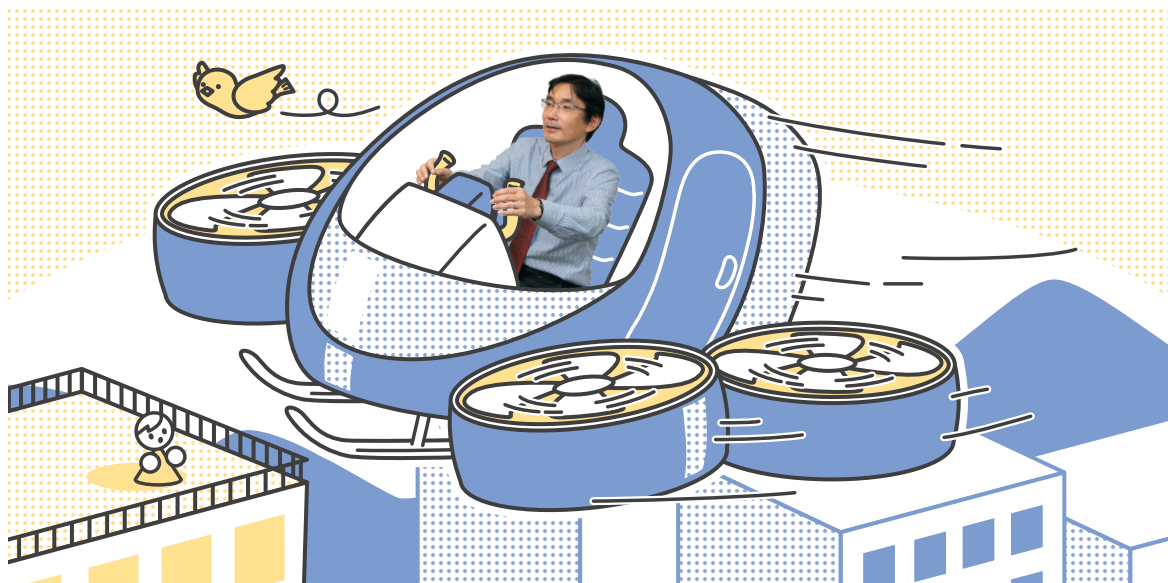


Q 空飛ぶクルマの研究は
どこまで進んでいますか？

A 2025年の大阪万博に向け、
操縦士が乗って飛行実験を始めています。

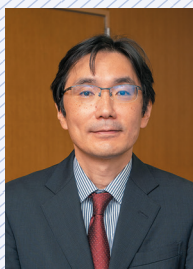


飛行ルートや利用シーンを
限定すれば、実用化は近い？!

今、世界中で開発されている『空飛ぶクルマ』を知っていますか？電動で複数のプロペラを使い、高層ビルの少し上の高さを飛ぶことを想定した乗り物です。飛行機と違い、音が静かで垂直離着陸できるので、みなさんのお家のそばからも利用できる時代が、もうすぐ来るかもしれません。国内では、2025年の大阪・関西万博の会場で飛行させることを目指しています。実用化の前には、安全性はもちろん、機体の構成や航路・通信をどうするかなど、考え解決すべき課題が多くあります。しかし、救急医療（医師を病院から直接急患のもとへ運ぶ）や、災害時（道路が寸断された被災地へ物資を運ぶ）などの緊急用途も含め、早い実用化が期待され、現在開発が進められています。

ターゲットが見えてくると
必要な機能や技術もリアルに

私は輸送機器をつくる企業で、航空機・ヘリコプター・新幹線・バイクなど多くの乗り物の開発に携わってきました。その内容は、性能を向上させる新しい構造や、その構造の寸法を決める構造設計法の研究開発です。新製品の開発では、「どういう人がどんなシチュエーションで使うか、そのためにはどんな性能が必要か」を、具体的にイメージすることが大切です。その性能を成立させるための機能は何か、どこでどのように使われるかというストーリーが見えてくると、自ずと開発の自身、開発の方向性、自分は何をするべきか、が見えてくるものです。学生さんには、各種の輸送機器の設計方法をただ学ぶだけではなく、まだ見ぬ未来へ思いを巡らせて、世の中を変えていく新しい何かを生み出していく能力を身に付けて欲しいと思います。



松原 剛 先生

Matsubara Go

輸送機器をつくる企業の研究所に長年勤めた後、2022年に本学に着任しました。製品や新技術の開発だけでなく、市場検討やアフタービジネスなどコンサルやベンチャーとの仕事も多く、分野の垣根を超えて情報を提供していきたいと思っています。

♡ お気に入りアイテム

航空機設計部の部長から
贈られた旅客機の模型



退職時に、航空機設計部の部長からいただいた旅客機の模型です。この機体に合わせて新しい設計法を提案した思い出があります。開発した中でも、特に印象に残っている製品です。模型は、研究室の棚に大切に飾っています。